

現地研修「別府・日出史跡巡り」(一)

石垣原合戦古戦場跡

これまで佐伯史談会は、独自の定期研修として各地の文化財や史跡等を見学し佐伯市の歴史について学習してきた。平成二十四年度より佐伯市周辺の文化財・史跡等の見学を行うことになり新たな気持ちで研修に取り組んだ。第一回目は津久見市の史跡を見学した。

今年度は別府市と日出町の史跡を見学する。

四月十二日朝八時、総合庁舎前を出発。別府での視察は南立石の「石垣原合戦古戦場めぐり」である。

参加者は二十六名、ガイドは別府史談会理事の矢島嗣久氏に依頼した。

石垣原合戦は、慶長五年(一六〇〇)九月十五日に濃州関ヶ原で行われた天下分け目の戦いの二日前に起きた合戦である。

この戦いは「九州の関ヶ原」とも呼ばれ、豊後の武将た

ちが東西に分かれて勝敗を争っている。

それに先立つ文禄二年(一五九三)当時、豊後の国は大友義鑑の嫡子大友義統が朝鮮の役での不祥事により領地を没収され太閤蔵入地となっていた。

翌文禄三年(一五九四)、豊後の国は竹中重利(豊後高田)、熊谷直陳(安岐)、福原直高(臼杵)、早川長敏(府内)、中川秀成(岡)垣見家純(富来)、毛利高政(日田)等に分割された。

慶長二年(一五九七)早川長敏が木付(杵築)に転封され、府内に石田三成の女婿福原直高が入り、臼杵に太田一吉が入った。

慶長四年(一五九八)秀吉の死後、細川忠興(速見・湯布院)が木付に入り、早川長敏が再び府内に、福原直高は不祥事により改易された。黒田如水孝高(下毛・宇佐)はそれ以前より中津を領していた。

一、大友氏の改易と義統のその後

大友義統は改易後、毛利輝元のもとに預けられ、後常陸国水戸の佐竹家に幽閉塾居を命じられた。慶長四年許されて大友義乗(義統子)と共に江戸・京都に在住する。大

友譜代の将吉弘統幸は柳川に、田原紹忍・宗像掃部は竹田、岡藩に寄寓していた。

二、石垣原合戦の経過

慶長五年（一六〇〇）六月、徳川家康（東軍）が上杉景勝討伐に出発。八月、石田三成（西軍）が大垣城に入り、まさに関ヶ原の戦いの幕が開かれようとしていた。九月、大友義統は「大友家の復興」を目的に、秀頼から具足・馬・長柄槍・鉄砲・銀子等を拝受し、毛利輝元の援兵と旧大友家家来の参集により大友軍を編成、家臣の諫言を振り切り西軍として旗揚げ、九日別府浜脇に上陸、夜別府立石山古屋敷に布陣する。

大友家譜代の将吉弘統幸（立花宗茂客将）、宗像掃部鎮継（岡藩中川氏出仕）、田原紹忍親賢（岡藩中川氏出仕）、都甲兵部、臼杵主膳、吉良伝右衛門など三十数名の諸将と僅かの手兵がこれに参加、西軍として立石山に参集する。久我四郎三郎の「石垣原合戦の次第覚え」では、「大友勢都合九百余騎」とある。吉弘統幸は台地の東坂本に、宗像掃部は台地の西御堂ヶ原に布陣する。

当時の豊後の国の諸大名は、秀吉により大名となった

者が多く、早川長敏、福原直高、熊谷直陳、垣見家純、太田一吉が西軍、細川忠興（代官松井康之・有吉立行）、黒田如水孝高（中津）が東軍として参加した。

竹中重利、毛利高政、中川秀茂は東軍として参加する旨を家康に告げ中立の立場を取る。大友義統の出陣を聞いた黒田孝高軍は九日に中津を発ち、高田、富来、安岐、木付を経て十三日別府加来殿山（角山・ルミエールの丘）に布陣、先発の松井・有吉軍は対面する実相寺山に布陣。総勢四千三百余名。

十三日巳の刻から酉の刻まで石垣原で対戦、大友勢二四四名、黒田勢三八二名が戦死、大友の譜代の将、吉弘統幸、宗像掃部、都甲兵部が戦死している。

この戦いの際、大友の臣宗像掃部、田原紹忍が中川氏の旗指物を陣に立て中川氏（岡藩）が西軍に参加するの体を見せ、中川氏は家康の不興をかい、汚名挽回の為、関ヶ原の戦い終了後の十月三日、四日西軍の臼杵藩主太田一吉氏と戦い多くの臣を失う。大友の譜代の将田原紹忍がこの戦いで戦死している（佐賀関の戦い）。

十五日関ヶ原の戦い以後、黒田孝高は熊谷、垣見、久留米の毛利勝信を討ち豊前豊後を制圧する。

大友義統は十四日夜、海雲寺で剃髪、僧衣を纏い降伏。

三、石垣原古戦場を巡る

(一) 吉弘嘉兵衛統幸陣所跡



吉弘統幸の陣所があった「みゆき坂展望台」
標高 140m、観海寺温泉・スキノイパレスの下

この吉弘統幸の陣は、大友軍の鶴翼かくよくの陣の右翼にあたる。現在は樹木や家に遮られて展望は良くないが右斜め前方に黒田側の陣のあった実相寺山が展望出来る。場所はスキノイパレスに向かう丁度カーブになった所で駐車出来ず、車中よりの見学だった。説明文には「石垣原合戦大友方右翼の将、吉弘嘉兵衛統幸陣所跡」とあり、次のような説明が為されていた。

この「坂本」の大地一帯は天下を二分して戦われた関ヶ原の戦いの二日前の慶長五年（一六〇〇）九月十三日に西軍石田三成方についた旧豊後国主二十二代大友義統と東軍徳川家康方の前中津城主黒田孝高（如水）が激突した、いわゆる石垣原合戦において、大友方右翼の将としてその名を馳せた吉弘嘉兵衛統幸の陣があったとされる。吉弘統幸は旧主君拳兵の報を聞き、豊後立石村に馳せ参じ、この合戦において鬼神のような活躍で二十数騎の敵将を討ち取り、黒田軍をおおいに苦しめたが、七番掛けで遂に力尽き討ち取られたと言われる。行年三十八歳であった。

（別府教育委員会）

現在、この公園は綺麗に整備されている。右手の一角には「皇太子殿下行啓祈念碑」（明治四十年十一月七日行啓、

海軍大将伯爵東郷平八郎謹書)がある。碑の入り口の門柱に南豊後学毛利莫敬書の文字が刻まれている。

(二) 大友義統本陣跡と供養塔



スギノイパレス前の道を上り、海雲寺の左手を進むと大友義統本陣跡がある。

義統の本陣は近くの古屋園(古屋庄屋宅)が当てられ、すぐ近くの天満天神社の上には左翼の宗像掃部の陣が置かれていた。本陣跡には「大友義統本陣跡」の記念碑や合戦で亡くなった大友・黒田両軍の供養塔等も建てられて

いる。



十二代四百年の長い間豊後を支配した大友氏が敗北しました。」とある。その碑の裏には「付近の歴史」と題し、次のような文がある。

「この付近は江戸時代を通じて速見郡立石村と呼ばれて

大友義統本陣跡の記念碑には次のような文が刻まれている。

「この付近はもと立石村の古屋園とよばれ、別府市指定史跡石垣原合戦地の大友義統本陣跡です。石垣原合戦は慶長五年(一六〇〇)の秋九月豊臣方の大友義統と徳川方の黒田如水が石垣原で七回にわたって戦いました。此の戦いで二

いた所である。慶長六年（一六〇一）以後百年余り萩原氏の支配する所であった。その後は幕府領（天領）となり日田代官の支配する所となった。天領だった為、明治元年には日田県になったが明治四年十一月には大分県となった。大分県になってからの学校や役場はここに設けられた。学校は初め海雲寺の一室で開校したが、のち海雲寺の左隣の庄屋分家屋敷、庄屋本家屋敷、天満社前北園を転々と移転し昭和十三年現在地に移った。役場はここにあった古屋庄屋の役宅を使用した。明治二十二年の市町村制実施からは石垣村の南立石となり南石垣に移った。その後昭和十年九月四日石垣村が別府市に合併してから、別府市の大字南立石となり今日に至った。

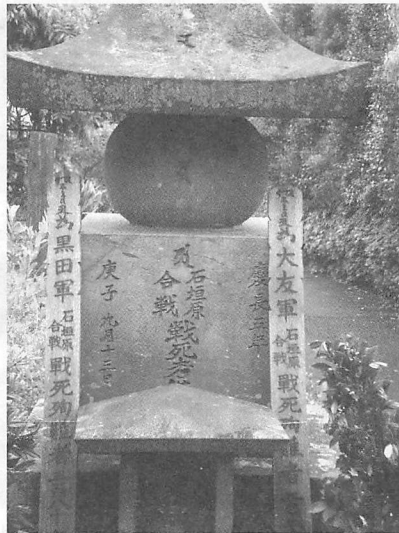
昭和六十三年三月吉日建立

解説碑寄贈者 古屋家三十六代古屋勝馬

柳井春溪謹書 とある。

この古屋家は石垣原合戦の際、この地域の庄屋を勤めており、大友義統が立石村に陣を敷いたと本陣になった所である。古屋家三十六代古屋勝馬氏がこの本陣跡に記念碑を建てている。「本陣跡の記念碑」の左横には「石垣原合戦大友本陣の歌」の碑や「旧立石村天満天神宮由緒

記」の記念碑、右側には「石垣原合戦戦死者供養塔」が祀られ毎年回向が行われていると言う。



石垣原合戦の供養塔には、中央に「慶長五年石垣原合戦戦死者供養塔 庚子九月十三日」の文字が、左右の卒塔婆にはそれぞれ「大友軍石垣原合戦戦死殉難者二百二十有 余精霊菩提追福供法資塔」「黒田軍石垣原合戦戦死殉難者 三百八十有余精霊菩提追善供粮資塔」と書かれている。

この道を更に進むと大友軍左翼の将宗像掃部の墓がある立石村天神天満宮に出る。

(三) 立石村天満天神宮と宗像神社



え古屋氏が祠官に任じられている。

天満宮の天井には石垣原合戦の様子が絵物語として描かれている。原画は元陸軍日出生台演習場看守村田少佐が紙芝居として作成したもので、県立緑が丘高校教諭の

この天満宮は

「旧立石村天満天神宮由緒記」によると、文明四年（一四七二）以後この地に祀られたものである。江戸時代、荻原三位兼従の所領になるや荻原家の中居新右衛門、大角主水、鈴木采女、鈴木左京等の連名で天満天神宮に社領として田高七斗七升四合を与

指導のもと芸術短期大学生大江朱美、橋本昌子が書いたものである。



石垣原合戦の図一天井画三十三枚のうち

この天満天神宮の境内には別府市の保護樹の楠の木がある。樹齢四、五百年と言われている。

この天満宮の右手に、大友の将宗像掃部の墓がある。宗像神社として祀られている。



宗像掃部の実際

の陣はこの天満宮の左手後方、掘田温泉付近にあったという。

宗像掃部（岡藩
葎郷千八百五十
石）は、大友義統が
豊後浜脇に上陸し
た時、他の有力大
名と共に参戦した
大友五大武将の一
人で田原紹忍（岡
藩柏原郷二千九百

十三石）と共に竹田岡藩中川家の客将であった。

石垣原の戦いでは第二軍の将として活躍し戦死してい

る。戦後、陣を敷いていた御堂ヶ原に祀られていたが、明治に南立石町本町の荒金氏の祖先が邸内に遷座、平成二十三年にこの天満天神社境内の一角に再び遷座され現在に至っている。

（四） 太平山海雲寺



この海雲寺は立石にある曹洞宗の寺である。石垣原合戦の終わった九月十四日夜、黒田藩の武将母里利太兵衛の勧めにより、大友義統が剃髪、黒染の衣を纏い部下十人程と黒田長政の陣に投降した所である。大友氏

は義統の子義乗^{よしのり}までで断絶。

義乗の弟、松野正照が別に大友氏を立ち上げ、徳川氏に仕

え、高家として幕末まで続いた。

(五) 古戦場橋と実相寺山

大友義統陣（スギノイバレス上）から見ると、黒田軍の陣を敷いていた加来殿山（角山・ルミエールの丘）と実相寺山は二キロメートル程しかはなれていない。当時は一面の原野で鶴見山の火山弾がいたる所にあつたとい

境川と古戦場橋



う。当時は鶴見原、石垣原と呼ばれていた。

鶴見霊園付近から鶴見地獄前を経て南立石に向かう。境川に懸かる橋古戦場橋がある。この付近が戦いの中心地であり館石、七ツ石、古戦

場等の名が残る。この境川は江戸時代の図に載っていない。

古戦場橋を右折してしばらく行くと矢野寓氏が作った古戦場公園がある。更に下った所に七つの巨石群のある七つ石稻荷公園があり更に下ると吉弘神社がある。

吉弘神社の先を左に上ると実相寺山がある。実相寺山は合戦の時、黒田軍の時枝平太夫と共に戦った木付代官松井康之、有吉立行の陣があつた所である。今は山上に仏舍利塔が立ち日本山妙法寺道場という建物がある。

(六) 吉弘神社

実相寺山の南西に大友の将、吉弘嘉兵衛統幸を祀る吉弘神社がある。「東軍につくべし」と諫言したが聞き入れられず、主君と共に黒田軍と戦い戦死した。

吉弘氏は大友氏の庶流田原氏の分かれで、国東市武蔵吉弘の永泰寺に七代の墓（五輪塔）が残されている。

武蔵川上流の楽庭八幡社の五穀豊穰の祭「吉弘楽」は有名なである。

井上九郎右衛門との一騎打ちで斃れた吉弘統幸は、黒田如水の願いにより宝泉寺の和尚と村人の手により現在の吉弘神社の奥の土地に葬られた。



吉弘嘉兵衛統幸の墓

この板碑型の墓は吉弘統幸の墓と言われ、高さ一、八五mあり刻名はない。この墓は「お塔様」と呼ばれ地域の人々から慕われ、嘉永七年（一八五四）には地元の名主が中心となり鳥居を奉獻、拝殿も建てられた。宝泉寺には「捐館統雲院殿傑勝連英大居士神儀」なる法名の位牌があるという。

碑の横には吉弘統幸の二男正久が仕えた細川氏が、統幸の忠臣さを惜しみ建立したという石殿がある。総高二、六六mで石垣積基礎の上に建てられている。石殿には細川家の家紋九曜紋が付けられている。



吉弘正久が仕えた細川氏が建てた石殿

また墓地内には統幸の家臣むらり室理清左衛門の墓もある。清左衛門は主君自刃を確認した後、一度旧武蔵町の吉弘村に帰るが一周忌に当たる慶長六年九月十三日戦いの結末を知らせ墓前で自害したとされている。清左衛門の家来二人も介錯後に自刃。共にこの墓地の一角に葬られている。室理清左衛門の墓に万治二年（一六五九）正月十六日の文字が刻まれている。戦後五十九年目の事である。

明治二十一年（一八八八）石垣村全域、南立石村、東山

村が吉弘神社の氏子になっている。

大正に入り石垣村長帆足藏太が中心になって吉弘会が結成され、大正十年（一九二二）九月には子孫である吉弘茂義氏等が政府の許可を得て「吉弘神社」を創建した。

大正十一年（一九二二）には吉弘茂義氏等が新たな神殿を造営した。

境内の一角には「下馬の松」と呼ばれる松がある。現在の松は四代目か五代目かの松であるが、当初は細川氏が統幸氏の墓の側に植えたものである。この墓の付近には豊前街道が通っており、松が育ち大きくなると通る人々が松の前で下馬したことからこの名がついたと言つ。

現在、この松の側に元大阪府知事林市藏氏の句碑がある。

「代から代へ 緑伝えよ 下馬の松」（市藏作）

現在の吉弘神社は、平成十三年（二〇〇二）四月、石垣原合戦四百年記念行事の一環として吉弘七平等によって建てられたものである。

※吉弘統幸辞世の歌

「あすは誰が 草の屍や照らすらん

石垣原の今日の月影」



平成十三年に作られた吉弘神社拝殿

私たちは、別府での「石垣原古戦場めぐり」を終え、次の訪問地である日出町に向かった。日出町では木下氏の居城陽谷城、木下家墓地を訪問する予定である。